

2022年2月27日

2021年度 森泰吉郎研究振興基金 研究者育成費  
研究成果報告書

所属：政策・メディア研究科

学年：後期博士課程3年

学籍番号：81849232

氏名：藤谷悠

## 1. 研究概要

筆者は、長期間に渡ってひきこもりだった過去の経験を基に、「ひきこもり学」という新たな学問の創造を目指している。“Hikikomori”という言葉が世界共通語となるなど、現在では国際的に認知されているひきこもりという現象について調査するために、日本各地で開催されている「自助会・当事者会」と呼ばれる場の他に、フランスの「ラ・ボルド病院」という精神医療施設にも継続的に参与し、それらの現場で出会った日仏のひきこもり経験者に対する生活史調査を行なっている。また、研究視座として、申請者は自らの立場を当事者ではなく「共事者」として位置づけることで、「ひきこもり学」を当事者研究という枠組みのみに留まらぬ形で構想していく。

## 2. 本年度の研究成果

2021年度の研究活動は、昨年から引き続きコロナ禍の影響を受けつつも、状況とタイミングを見計らいながら調査対象者と会い、また現場に足を運ぶ形での調査を実施できたことができた。

### 2.1. フランスでのフィールドワークについて

主な研究成果としては、まずフランスでのフィールドワークを実施できたことが挙げられる。昨年度はコロナ禍という未知の事態に対して日本とフランスの両国共に慎重を極める状況であったため実施することができなかったが、今年は両国とも条件を設けつつも出入国に対して柔軟な対応が可能となった。それでもやはり感染者数の増減など予測できず、そうした状況の推移を見計らっているうちに当初の予定通りの時期ではなく年度末になってからようやく実施する形となった(2022年1月-2月)。しかし、過去に実施した時よりも長期間で現場に入ることができたため、より充実した調査となったように思う。

前回来た時から2年が経過していたため、このコロナ禍の只中であった2年間で病院の人々がどのように過ごしたかということについての聞き取りなども行った。患者と職

員・医者とが立場の分け隔てなく密な関係の中で様々な活動を共に行うことがラ・ボルド病院（図1）の実践する「制度精神療法」にとって重要なことであるため、その関係の距離が制限される状況となった当初の苦労が偲ばれた。現在では、院内の皆がワクチン接種を終えていたり、日々のマスク着用を基本づけているなどの対策をしながら、以前のような元の活動状況を取り戻しているようであった。筆者自身もスタジエール（研修生）として院内の多岐に渡る仕事や活動に参加しながら、日々起こる様々な出来事を観察し、話を聞き、記録した。

また、患者の一人にひきこもり経験のある方がいるため、その患者に対するインタビュー調査も併せて実施した。聞いた話からは、日本では一般化しているひきこもりの問題も、西欧社会では顕在化してからまだ日の浅いものであり、単純に精神の病として類型化される点が現在の一つの問題であるように感じられた。インタビュー内容をさらに詳細に分析し、博士論文の執筆に活かしたいと思う。



図1：2022年2月のラ・ボルド病院。かつての城とその周辺の敷地を利用している。

## 2.2. ひきこもり経験者へのインタビュー調査

日本で行った調査としては、ひきこもり経験者への継続的なインタビュー調査を行っている。コロナ禍の影響で予定の調整などが難しく、回数をこなせたわけではなかったが、それでも何人かにインタビューを行うことはできた。また、それらを含めて、これまでに行っていたインタビューの録音データの文字起こしを全て完了したため、今後の論文執筆に向けたインタビューデータの考察が本格化する見込みである。

### 3. 学術的成果と展望

今年度の具体的成果として、二度の研究発表を行った。まず7月に、昨年度に実施する予定であったが、コロナ禍の影響で開催が延期されていた 32nd International Congress of Psychology (国際心理学会) でのポスター発表を行った。これまでに行っているひきこもり経験者に対するオーラルヒストリー調査の研究を概観するような内容であり、また筆者自身がひきこもり経験者であることから当事者研究という文脈を盛り込んでいることも紹介した。9月には、「声の主体による文化・社会構築研究会」が主催する第4回声のつながり研究会にて、当事者性・代表性・専門性を有するそれぞれのポジショナリティから発せられる言説の間にある距離をめぐる問題について発表した。

来年度は、通年で博士論文の執筆をしつつ、その過程で考察された結果を小分けにして学術誌に投稿しながら、博士論文の完成を目指していく予定である。

### 4. 学会発表

Fujitani, H. (2021). Oral History research on Hikikomoris by the researcher who was Hikikomori. Prague, Czech Republic (Online), July 18-23 2021. 32nd International Congress of Psychology.

藤谷悠 (2021). ひきこもる声と代弁する声ー当事者性・代表性・専門性をめぐるポジショナリティについて, オンライン開催, 2021年9月1日, 第4回声のつながり研究会, 声の主体による文化・社会構築研究会.

以上